

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第53集)

# 白川金色院跡発掘調査概報

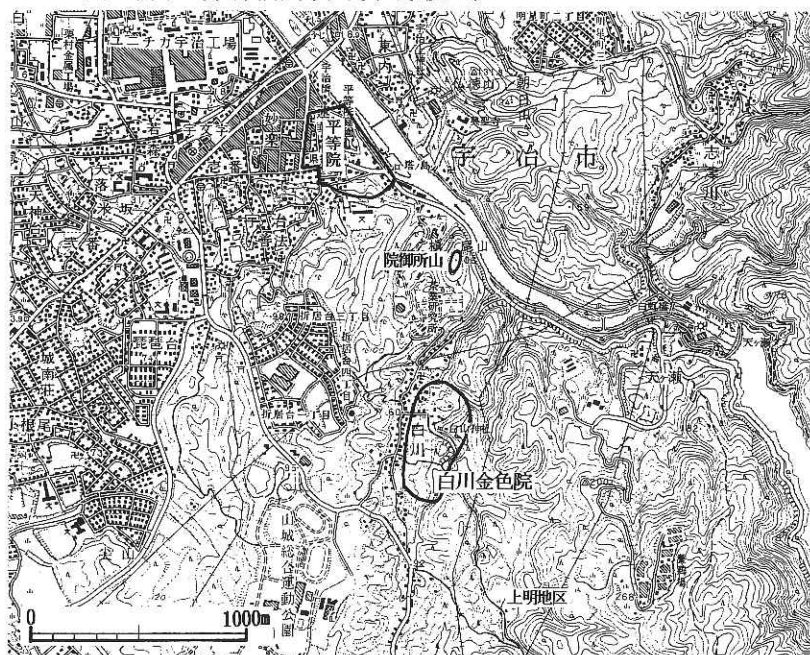
—平成13年度—

2002

宇治市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、宇治市教育委員会が平成13年度に国庫補助事業として実施した、白川金色院跡発掘調査の概要を取りまとめたものである。
2. 本発掘調査の経費は総額6,000,000円で、国から国宝重要文化財等保存整備費補助金としてその50%を、京都府から文化財緊急保存費補助金として25%の補助を得た。
3. 本発掘調査は、平成13年10月18日に開始し平成14年2月22日に終了した。発掘面積は、約150㎡である。
4. 本発掘調査は下記の体制で実施した。  
発掘調査責任者：宇治市教育委員会 教育長 谷口道夫  
調査専門委員会：[委員長] 狩野 久（京都橘女子大学）  
[副委員長] 中川恵次（宇治市文化財保護委員長）  
[委員] 上原真人（京都大学）・仲 隆裕（京都造形芸術大学）  
西山良平（京都大学）・山岸常人（京都大学）  
発掘調査担当者：宇治市歴史資料館 文化財保護係 主 事 浜中邦弘  
発掘調査事務局：宇治市歴史資料館  
発掘調査参加者：西田倫子・高橋玄太・奥 里子・大塚朋世・久保千恵子・畑 陽子・志村みどり  
山下夏奈・岡本智子
5. 実施にあたっては下記の方々よりご協力・ご指導賜った。記して感謝したい。（順不同・敬称略）  
文化庁記念物課、京都府教育委員会文化財保護課、京都府立山城郷土資料館、坂井秀弥・磯村幸男（文化庁記念物課）、白川区、服部正吉、服部明信、藤川昌子、藤川恭子、古川伍美、古川悦子
6. 本発掘調査の関係資料及び出土品は宇治市歴史資料館が保管している。
7. 本書の編集は宇治市歴史資料館が行い、実務を浜中邦弘が担当した。
8. 執筆の分担は下記のとおりである。  
浜中邦弘 ..... I・II・III・IV・VI  
西田倫子（京都橘女子大学大学院生） ..... V



白川金色院の位置

## 序

白川金色院跡は、平等院の山一つ南の美しい白川の谷里に残る遺跡で、平安時代後期にあたる康和4年（1102）に、関白太政大臣藤原頼通の娘であり、後冷泉皇后であった藤原寛子が建立したと伝える寺跡です。記録によれば、その本堂は文殊菩薩を安置した金色に輝く大きな仏殿であったといい、その他にも多くの坊舎が建立されていました。

現在、白川区には、この白川金色院に関係する重要文化財指定の仏像あるいは鎮守社である白山神社、また惣門などが残され、往時の幾許かを偲ぶことができます。しかし平安王朝期に花開いた栄華の実像は、永い時の経つ中で白川の自然の中に埋もれ、この谷里の風景として息づくこととなりました。

白川金色院跡の往時の姿を解明しようと、私ども教育委員会が文化庁・京都府教育委員会そして地元白川区の皆様のご協力の中で発掘調査を開始したのは平成5年度のことでした。以来、今年度で9年目を迎えます。平成5年度から5年間の調査は、内容確認を主とするもので、平安期の仏堂跡の発見や貴族の生活を彷彿とさせる豪華な経塚出土品、あるいは絵巻物から飛び出してきたような室町時代の坊院跡の発掘などから、この遺跡の歴史的な重要性あるいは文化財的価値の高さを伺うことができました。そして平成10年度から5ヶ年の調査は範囲確認を主とするもので、今年度の発掘調査では、本書にその概要を示すとおり、寺域の西限を概ねながら確定するにいたりました。

白川金色院跡は、世界遺産であり国宝の平等院や宇治上神社と同じく、平安時代の宇治に花開いた王朝文化を代表する重要な遺跡です。教育委員会といたしましては、今までの発掘調査成果を踏まえ、更に実態解明の発掘を継続しつつ、この遺跡の保存と活用について検討を進めてゆきたいと考えています。

末筆になりましたが、発掘調査を実施するにあたりご指導いただいた関係機関・各位またご協力いただいた地元白川区の皆様にご心よりお礼申し上げます。

平成14年3月

宇治市教育委員会

教育長 谷口道夫

## I. はじめに

白川金色院は、平安後期の康和4年（1102）に藤原頼通の娘四条宮寛子によって創建されたと伝承される寺で、室町中期の長祿4年（1460）に焼失するも直ちに勧進・復興され、「白川十六坊」と総称される数多くの坊院を有する中世的寺院として発展していった。しかしながら江戸中期頃には多くの坊院が廃絶していたようで、そして明治初年の廃仏毀釈によって廃絶、廃寺となり現在は白山神社・惣門等のわずかな建造物を残して「遺跡」として今日に伝えられている。白川金色院は遺跡としてはこれまでの発掘調査からも裏付けられるように残存状況が極めて良く、またその多彩な情報量から平安時代後期から幕末まで続く一寺院の時代的変容を把握することができ、学術的にも極めて貴重な遺産である。

平成10年度より範囲確認の発掘調査を実施しており、今年度は西限確定が目的の調査である。調査地は惣門を経てほぼ南北に貫く段丘崖が西限の境界線になるであろう想定のもとにその崖下・上それぞれに設定した。

土地所有者である服部明信氏・藤川昌子氏・古川伍美氏のご協力を得て、白川宮の前6番地の1、宮の後11番地、川上り谷45番地の1・2、75番地の1、娑婆山13番地で発掘調査を実施することとした。



第1図 金色院御堂再興勸進状

## Ⅱ. 遺跡の環境

### A. 位置と地形

宇治市白川は、平等院の南南東約1.5km、平等院の東に連なる標高100m程の丘陵を越えたところに位置する南北に細長い小盆地である。黒川道祐著の山城国地誌『雍州府誌』（貞享元年〔1684〕開板）には、白川は「山水幽水の地にて誠に小桃源と謂うべし」と評されるように江戸時代には幽閑静寂な地として認識されていた。

この白川谷は、長さ南北約1km、谷幅東西200～400m、谷底の標高は50m程、周囲の山丘は標高100m程である。山懐に抱かれた白川谷の西寄りを「白川」が北流し、現在は暗渠化し、谷を通る主要道路となっている。この「白川」を境に東西それぞれで大きく地形の状況が異なっている。西側は急峻な山丘がひかえ、「白川」沿いに平地部がわずかであるのに対し、東側では緩斜面が発達し、台地状となって広がっている。現在は水田や茶畑等の耕地として利用されている。寺跡はこの部分に展開するものと考えられる。この白川谷の北端の宇治川との接点部左岸に槇ノ尾山があるが、江戸時代の文献史料には別名「院御所山」と呼ばれ、寛子の別荘があったところとされている。地元では白山神社の故地であるという。頂部には土塁状の高まりが巡っており、金色院関係の遺構の可能性が指摘される。その他周辺の山々にも寺に関連される字名や伝承が数多くみられる。

### B. 沿革

ここでは文献史料に基づく白川金色院の歴史の変遷について述べていく。

白川金色院は、平安時代後期の康和四年（1102）に関白藤原頼通の娘にあたる四条宮寛子によって創建されたとされる。これは室町時代中期の寛正四年（1463）の『白川別所金色院勸進状』に記された内容であり、それ以前の文献史料には寛子創建に関わる記録はいまのところない。

嘉吉元年（1441）頃の成立とされる興福寺末派寺社の記録『興福寺官務牒疎』によれば、加賀白山を開いた高僧越智泰澄上人と昭澄上人によって養老4年（720）に開基、四条宮寛子によって中興されたと伝える。

この白川金色院に関する確実な史料で現在最古のものは、石山寺が所蔵する写経の奥書である。計7巻あり、意聖房・成熟房・文教房が、「宇治白河別所」「白河別所」で書写したと記す。仁平四年（1154）から永暦二年（1161）までの間である。12世紀中頃には、「別所」という性格を有する寺院であったようである。また当該期で注目すべき史料が『兵範記』の仁平三年（1153）四月十五日条である。宇治離宮祭に奉仕する宇治白川等座座法師原60余人

が藤原忠実から田楽装束を下賜された内容である。離宮祭は離宮社の祭礼で、藤原忠実の援助によって大いに賑わっていたことが諸記録から伺える。この『兵範記』の仁平三年条は、当時田楽衆が白川にもいたことを示すものであり、狭谷等からも寺とは何らかの関わりをもっていたことが想起される。

元久元年（1204）十一月二十五日、従一位太政大臣で氏長者でもある九条良経が、平等院とともに白川別所に訪れたことが、撰関家九条家の家司を勤めた藤原定家の日記『明月記』にみえる。龍雲寺（宇治田原町所在）所蔵の大般若経奥書には「嘉元三年金色院辻坊書写」と記され、14世紀初頭には確実に金色院という名称が用いられていた。また後に「白川十六坊」と総称される坊の一部がこの頃成立していたことも伺い知れる。

長祿四年（1460）、盗火にあって寺が焼失したと前述の『勸進状』は伝え、この復興のため寛正四年（1463）の勸進状の作成、そして勸進が行われた。応仁元年（1467）、近衛家十三代当主近衛政家は、応仁の乱で騒然とする京都を避けて宇治に一年間疎開し、その際に白川別所に七度も巡見していることが『後法興院記』にみえる。また所々の庭を見物した記載から複数の庭園が存在、そして寺の復興が順調に行われたことを間接的ながら伺い知れる。

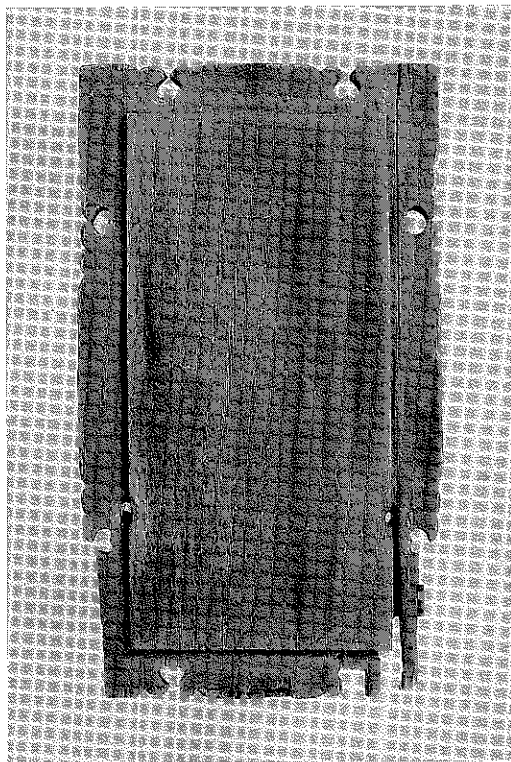
16世紀前半には、連歌師宗長が辻坊に宿泊し、たびたび連歌会を開催したことが『宗長日記』に記されている。復興後、数多くの坊院を有する一大寺院として発展したようだが、江

江戸時代中頃にはすでに多くの坊が衰退・廃絶したようで、明和三年（1766）の『庄屋・年寄等訴状写』には北之坊・福泉坊・蔵之坊の3坊しかみられなくなる。

幕末にはさらに衰退の一途を辿り、文人茶師上林清泉（1801～1870）作の『白山宮の図』によれば、坊は福泉坊のみで、堂塔では文殊堂・白山神社しか標記されていない。

明治に入り、金色院も廃仏毀釈の嵐の中で消滅、廃寺となった。

現在、跡地には金色院関連の建造物はわずかながら残る。16世紀中頃創建とされる地藏院には金色院関連の遺産が数多く継承されている。その中の一つが第2図の「文永三年」銘の扁額で、これら関連するものを現在実測・写真撮影等によって記録保存し、資料集成を進めている。



第2図 「文永三年」銘扁額

### Ⅲ. 調 査 経 過

白川金色院跡の計画的発掘調査はこれまでに計8回実施してきている。平成5年度から内容確認を主目的として平成9年度までの都合5ヶ年を目途として調査を行った。その成果は後述するように白川金色院跡が遺構・遺物いずれをとっても残りが極めて良く、遺跡の価値を知るには十分な成果を挙げることができた。これを第1期5ヶ年計画とする。平成10年度からは第2期5ヶ年計画として平成14年度までを目途に、範囲確認に充填を置いた調査を実施することとなった。今年度はその4年目で、西限確認を目的として実施した。

#### A. 過去の調査

計画的発掘調査が入る前の昭和55年に一度調査が行われている。古絵図には弁天池・弁天島が描かれたところで、現在の白川区集会所が建設される時に実施されたものである。詳細は不明ながら、池の存在とその年代が平安時代後期に溯る可能性が指摘された。そして平成5年度から昨年度までの7次にわたる発掘調査は、白川金色院を様々な視点から語るだけの成果を挙げることができた。

平成5年度は、明治期の最後まで残っていた福泉坊跡を発掘調査した。福泉坊跡の下層から平等院と同範の平安後期に比定される軒瓦が出土し、そのことから白川金色院が後世の記録が記す平安後期頃に創建されたことが概ね理解されることとなった。

平成6年度は、寺跡のメインストリートからかなり南側に離れた棚田上での調査で、調査の結果、室町中期に再興された坊院の一つが非常に良好な状態で確認され、往時の姿を見事に復元することができた。特に中心の主屋は「主殿造」とも呼ばれる建築様式で、発掘調査では初の実例として注目を浴びた。

平成7年度は、金色院の中心御堂とされる文殊堂跡地の発掘で、大きく2時期（平安・中世）にわたる遺構面が検出された。下層では礎石建物跡が検出された。詳細な規模や時期は不明ながら、平安期に想定される仏堂跡と理解された。

平成8年度は、昨年度発見の仏堂跡の規模確認の調査を中心に行った。その結果、建物は一間四面の南側に孫庇を有することが判明し、地鎮祭に使用され遺棄された「かわらけ」の示す年代観から12世紀初頭頃にこの建物が創建されたことが明らかとなった。創建期に帰属する初めての遺構確認であった。

平成9年度は、計5カ所を発掘した。調査の主な成果は、閼伽井跡と経塚遺構であった。閼伽井跡は、湧出部の山側に滝石状の石組を配していたことが明らかとなった。前面部に広がる平坦部の実態については、来年度の調査とした。経塚遺構は、踏査時に渥美産の経筒外

容器片が採取されたことによって確認調査を実施したもので、経塚本体ともいえる経筒についてはすでに失われていたものの、副納品が良好な状態で確認され、また埋納時に執行された跡を想定させる焼土壌等が見つかった。12世紀後半頃のものであった。

平成10年度からは、範囲確認を主とした調査に切り替わった。閼伽井跡の前面部と金色院中心域の南側を主に調査実施した。閼伽井跡では予想とは異なり、閼伽井跡の西側に方形の小池跡が見つかり、閼伽井の湧水はこの小池に一旦流れ込みその後寺川の方へと排水されることが明らかとなった。

平成11年度は寺域の南限を確定することを主目的に、従来の調査地点（寺跡中心域）より離れた南側のエリアを重点的に調査実施した。調査の結果、遺構は検出されなかったものの、室町期にまで溯る遺物が出土し、また坊跡が想定できる平坦面（茶畑）が付近に存在することから南限についてはさらに南側での調査が必要と判断された。

平成12年度では北限・南限をさらに詳細に確定するための調査を行った。いずれも明確な遺構は検出できなかったが、出土遺物から概ね範囲を確定するに至った。

## B. 調査の経過

今年度の発掘調査目的は西限を確定するためである。惣門を通り南北に細長く延びる段丘崖が寺の西限確定要素となる可能性を考え、段丘崖を基本線にその西・東それぞれに調査区を設定し調査を実施した。調査区は計4カ所設定した。発掘調査は平成13年10月18日に開始した。掘削は調査地の関係上、人力によって行った。このためトレンチは小規模にして、調査区内に数トレンチ設定して、成果の効率化に努めた。西限について一定の成果が得られた段階の平成14年1月31日に白川金色院跡調査専門委員会を開催し、現地視察と討議を行った。討議の中心は史跡指定の範囲で、史跡理念を考慮しての検討が必要等、専門的な指導を数多く受けた。その後現地作業は、委員会から指摘された遺構詳細確認調査と写真撮影・実測等

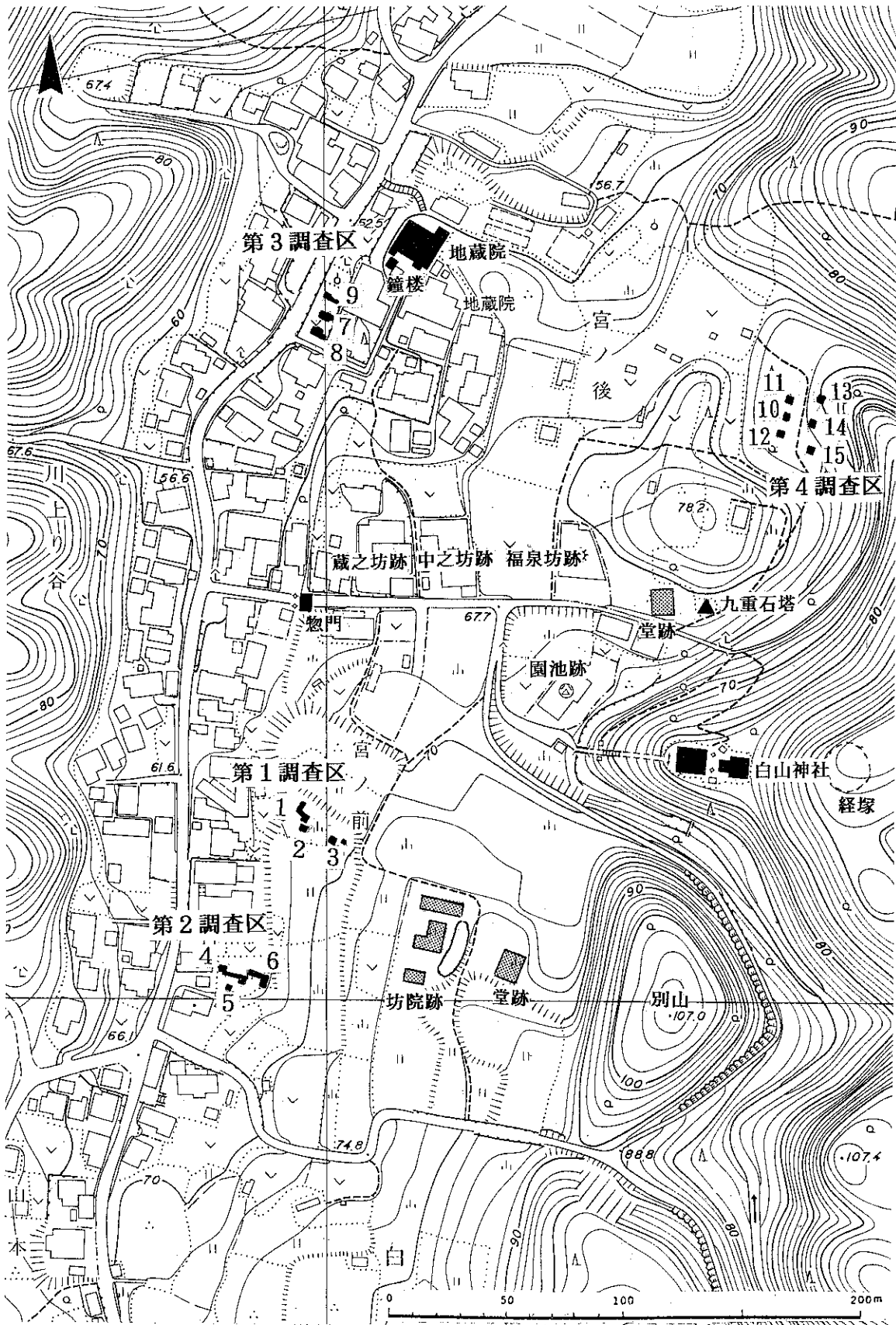


第3図 発掘作業風景

の記録保存を行い、記録保存が終了したトレンチから埋め戻しを随時開始していった。

全復旧が完了したのは2月22日であり、同日に発掘調査を終了した。なお発掘調査面積は結果的に計約150平方メートルである。





第4図 調査地の位置

## IV. 検 出 遺 構

調査区は計4カ所設定して、調査区それぞれの実態が明らかになるようにトレンチは随時増やしながら調査を行った。その結果計15カ所のトレンチとなった。十分な整理期間がないこともあり、詳細は正報告に譲ることとし、ここでは各調査区の成果の概略を述べていく。

### A. 第1調査区（第6～11図）

トレンチは計3カ所設定した。段丘崖直上の平坦地で、調査の結果、近世期に谷を埋め立てて造成し、耕作地として利用した状況が伺えた。旧地形は東から西への急斜面であったと理解された。造成土内からは平安後期の軒平瓦1点と中世土器片が少量ながら出土しており、周辺の地形状況から判断すれば北接する平坦地（坊跡想定地）からの流入と考えるのが妥当と考えられる。

### B. 第2調査区（第12～17図）

トレンチは計3カ所設定した。段丘崖直下の平坦地である。周辺の地形から東側と南側を一部開削した状況が看取された。段丘崖下にあたる西側は、南北に細長い谷筋があり、そのほぼ中央を南から北に向かって白川（現在暗渠）が蛇行しながら流れている。その川筋に沿ってその両側に住宅が密集、現在の白川の町並みが展開する。調査区はその南側空地で実施した。調査の結果、表土を掘削除去するとただちに地山層が検出された。この地山を掘り込んだ近代の攪乱穴が数カ所確認された。無遺物。状況的に平坦地の造成は近代以降と判断した。

### C. 第3調査区（第18～27図）

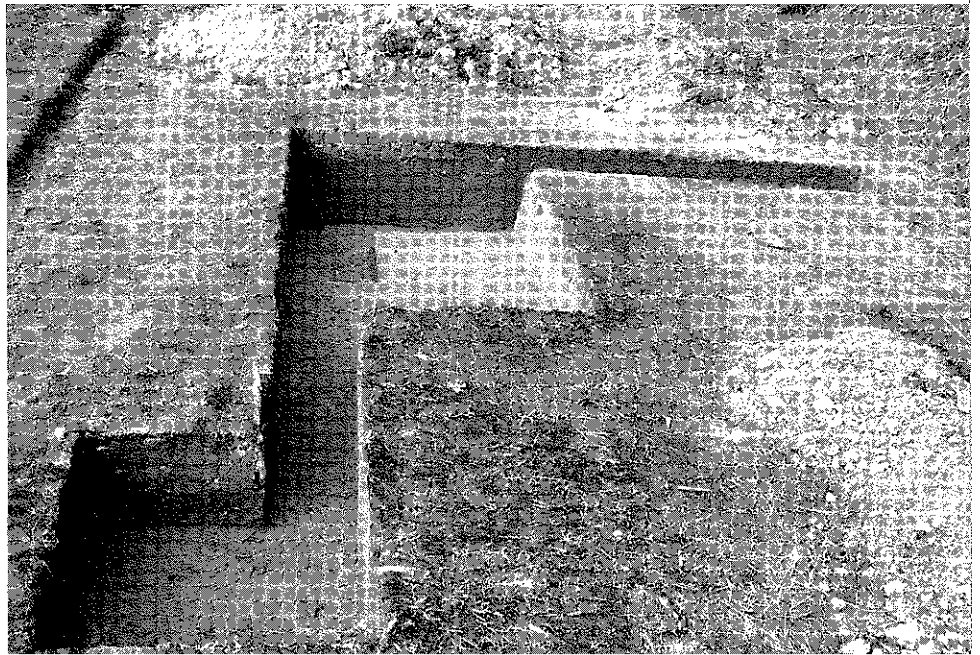
トレンチは計3カ所設定した。白川に東接する平坦地で、段丘崖が後世の造成によってその位置が判然としないところである。調査の結果、7・8トレンチで南から北に向かってやや蛇行して流れる溝一条が検出された。同一の溝である発掘の状況や周囲の地形等から段丘崖直下を沿って流れる小川状のものと想定された。溝の西斜面は粘土で叩き占められ、人為的な痕跡が伺えた。また溝肩部からその西側にかけて比較的固く締まり平坦面状となっていた。現段階ではこの溝に沿う舗装のなされていない道路を想定したい。溝の埋土は大きく2層の腐植堆積層よりなり、いずれも16世紀を主とする遺物が出土した。遺物の状態から近隣よりの廃棄が考えられる。

### D. 第4調査区（第28～35図）

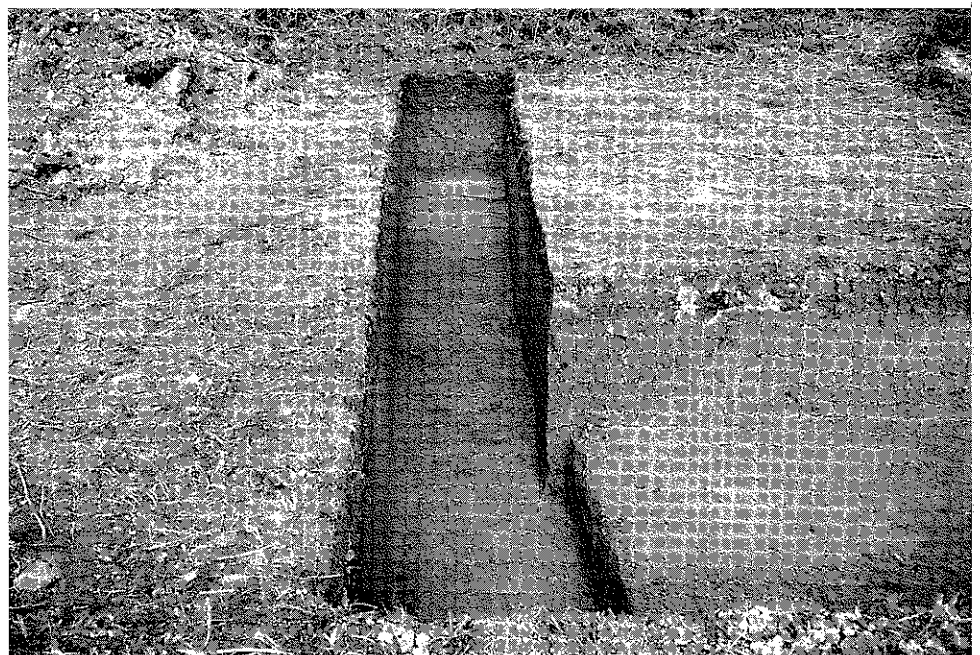
トレンチは計6カ所設定した。踏査によって平坦地が4面（西側に規模の大きな1面、東側に規模の小さい南北に並ぶ3面）確認されたところで、調査前は樹木の繁茂する状況であった。調査の結果、明確な遺構は検出されなかったが、遺物が少量出土した。いずれも包含層としての出土で、鎌倉期から江戸期までの遺物を含む。西側は今回詳細を明らかにしえなかったが、東側は近世耕作地として谷を盛土造成して平坦地化したものと判断された。



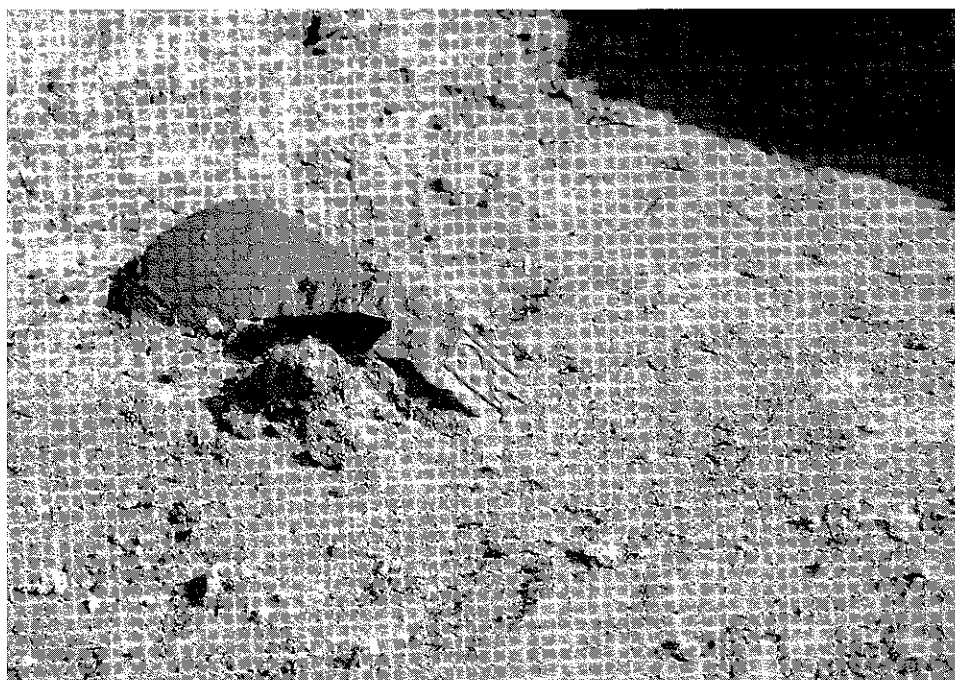
第5図 第1調査区(1・2・3トレンチ)全景(SE→NW)



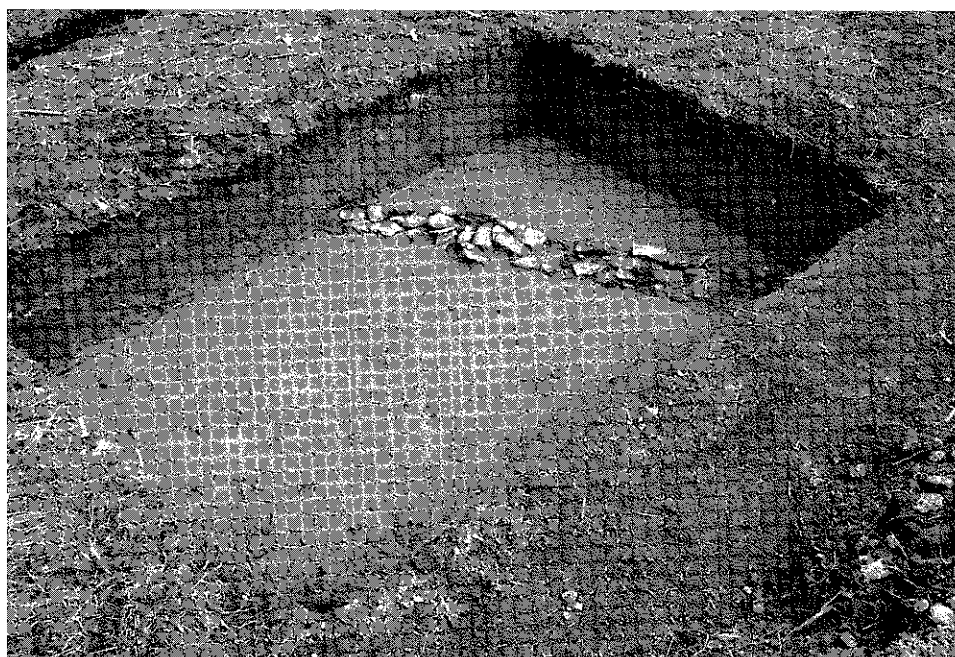
第6図 1トレンチ全景(SE→NW)



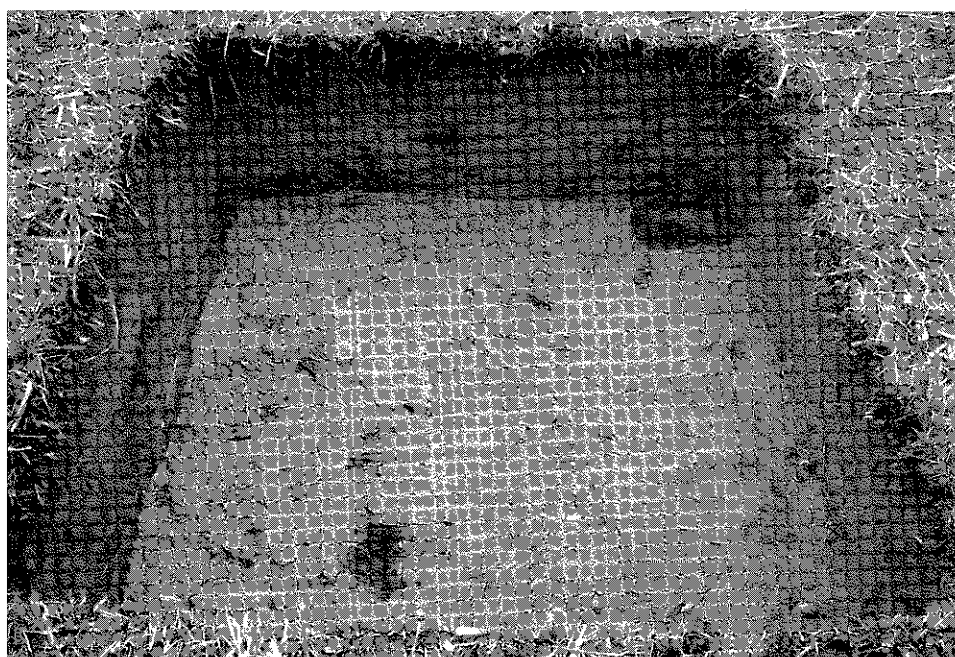
第7図 1トレンチ西側深掘箇所  
の状況(SW→NE)



第8図 1 トレンチ軒平瓦出土状況（包含層内, SW→NE）



第9図 2 トレンチ全景（NW→SE）



第10図 3 トレンチ全景（SE→NW）

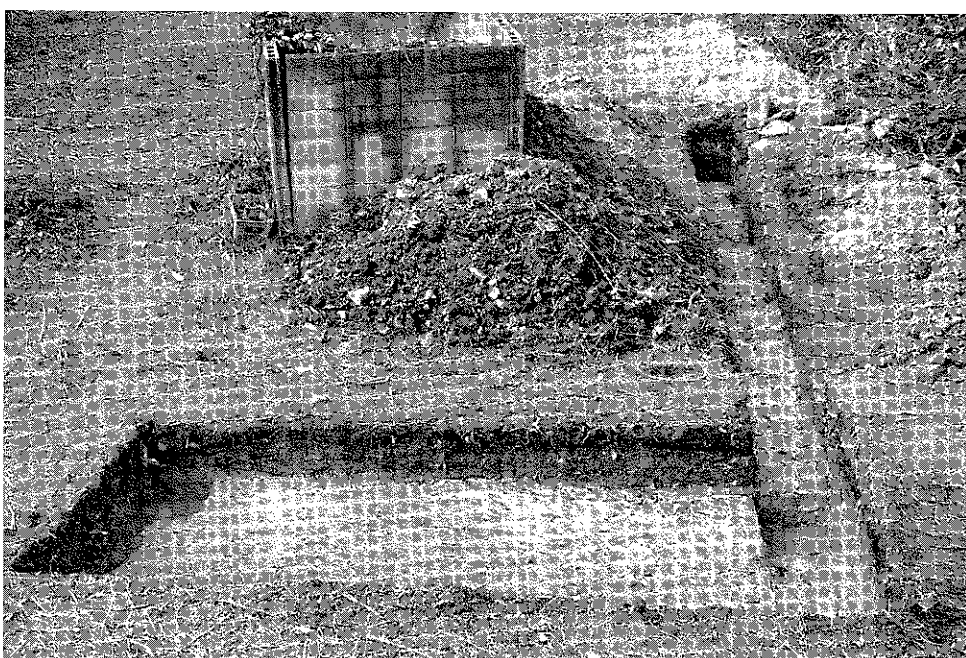
第11図 第2調査区(4・5・6トレンチ)全景 (NE→SW)

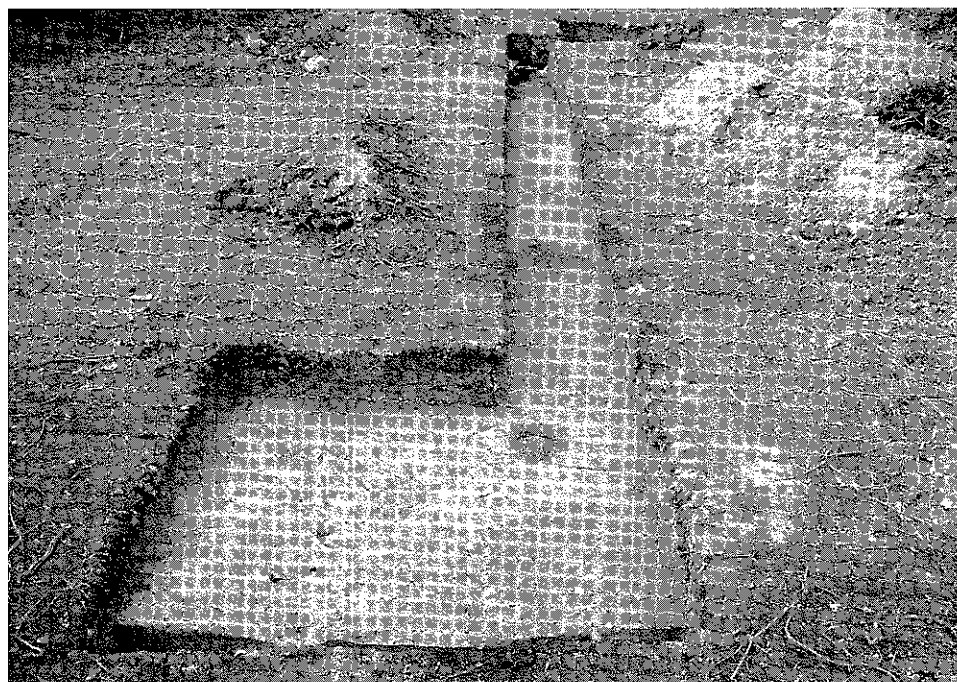


第12図 第2調査区の状況 (SE→NW)

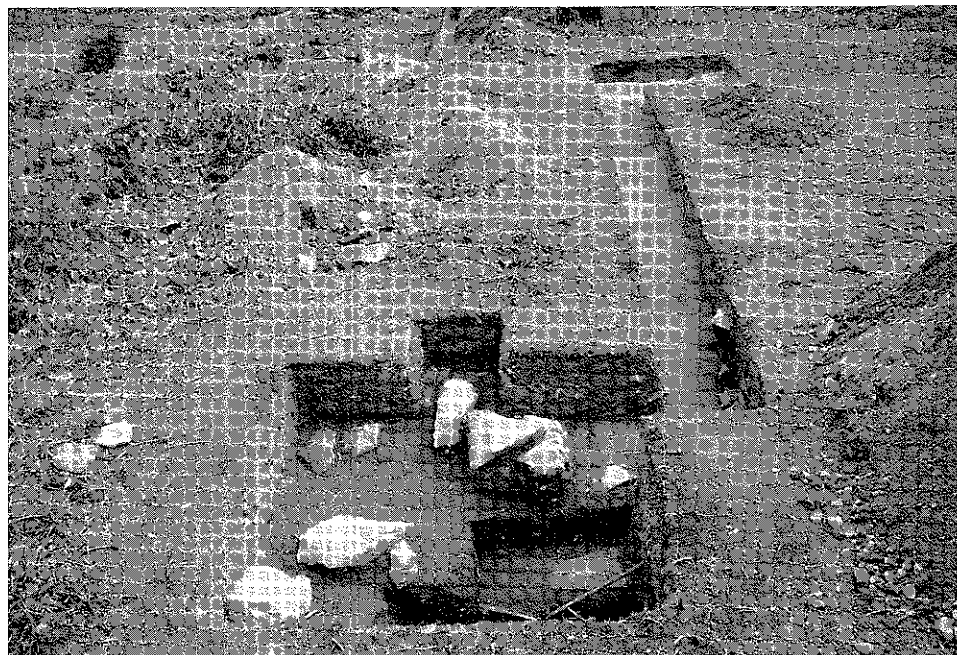


第13図 6トレンチ全景 (SE→NW)





第14図 4 トレンチ全景  
(SE→NW)

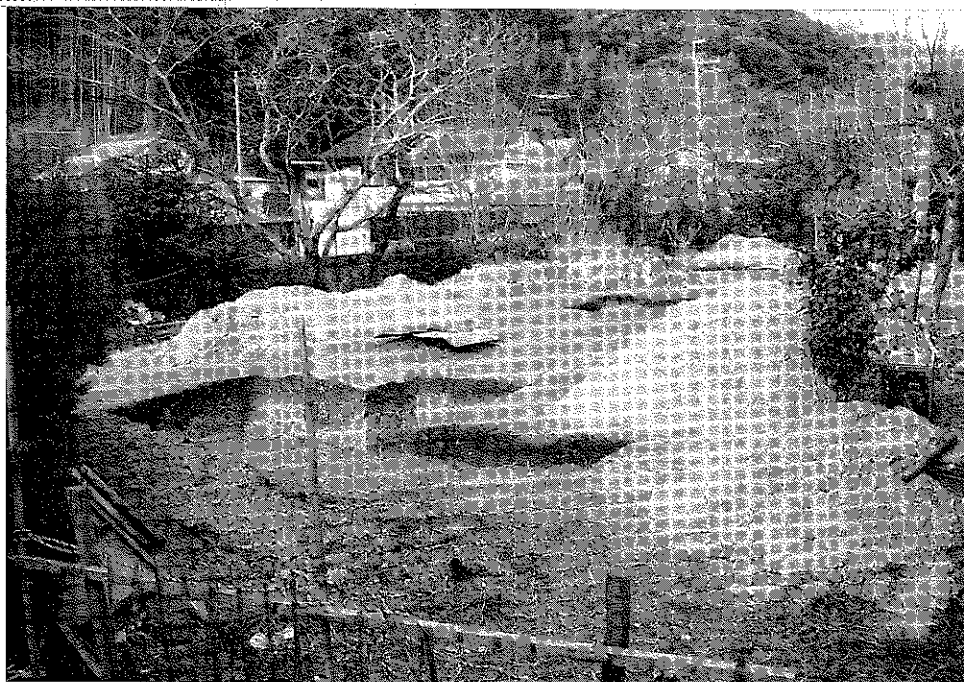


第15図 4 トレンチ全景  
(NW→SE)

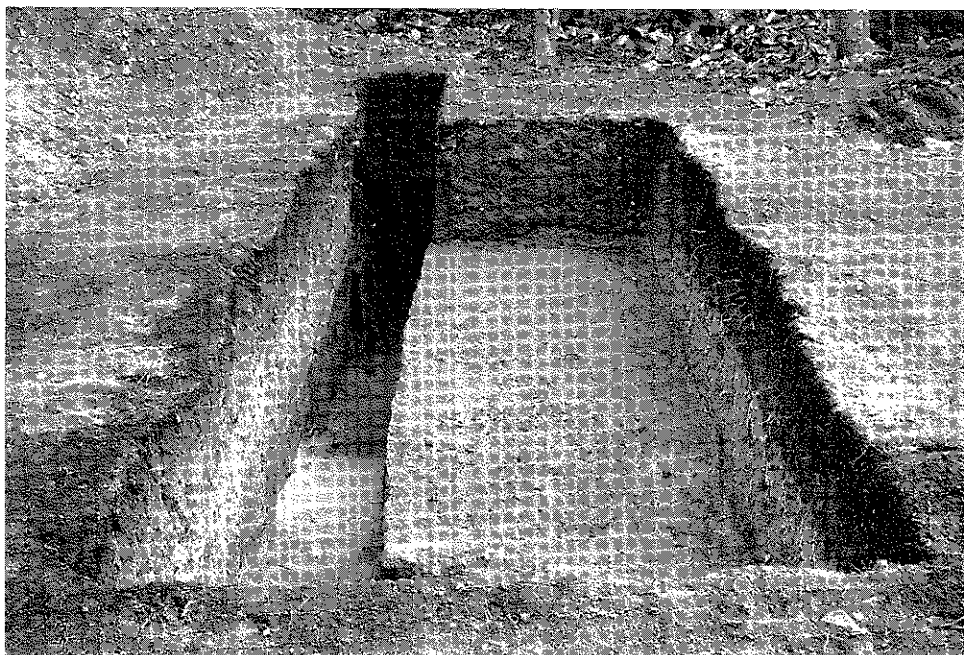


第16図 5 トレンチ全景  
(NW→SE)

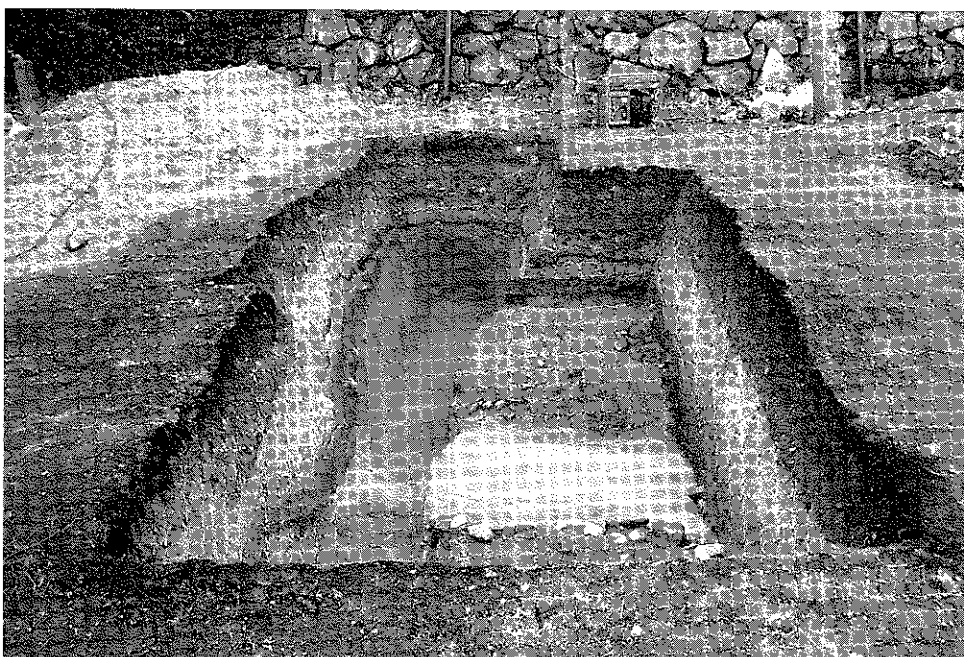
第17図 第3調査区全景  
(S→N)

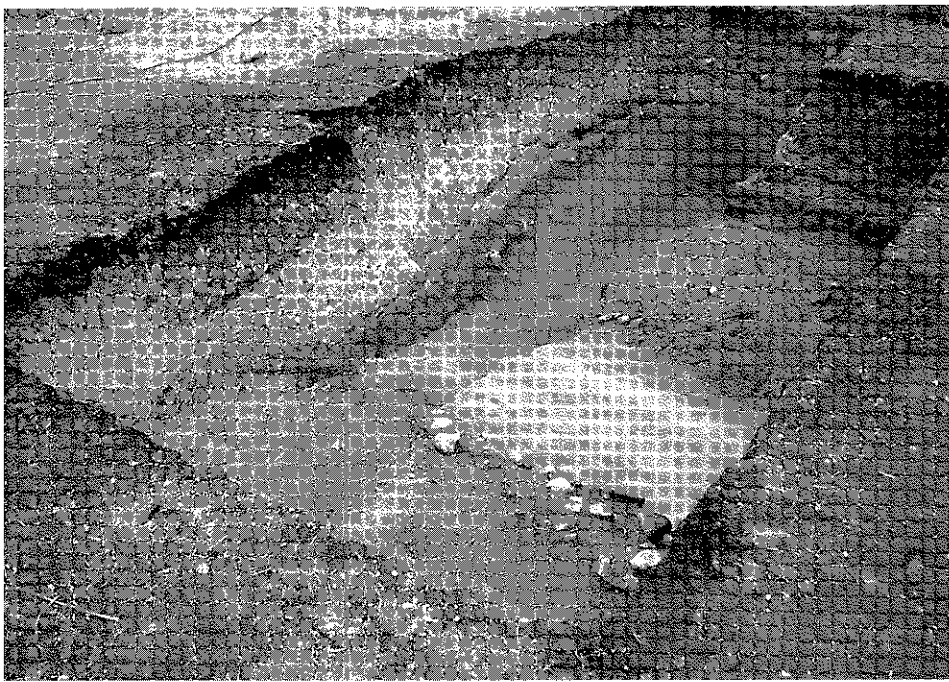


第18図 7トレンチ腐植堆積層  
(遺物包含)の上層検出  
状況 (W→E)

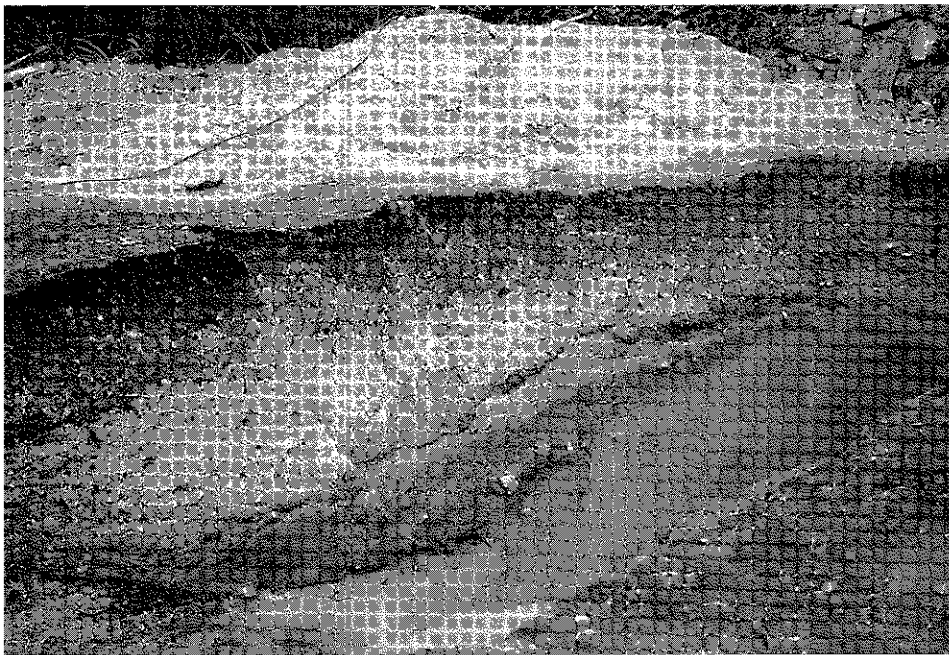


第19図 7トレンチ完掘状況  
(W→E)

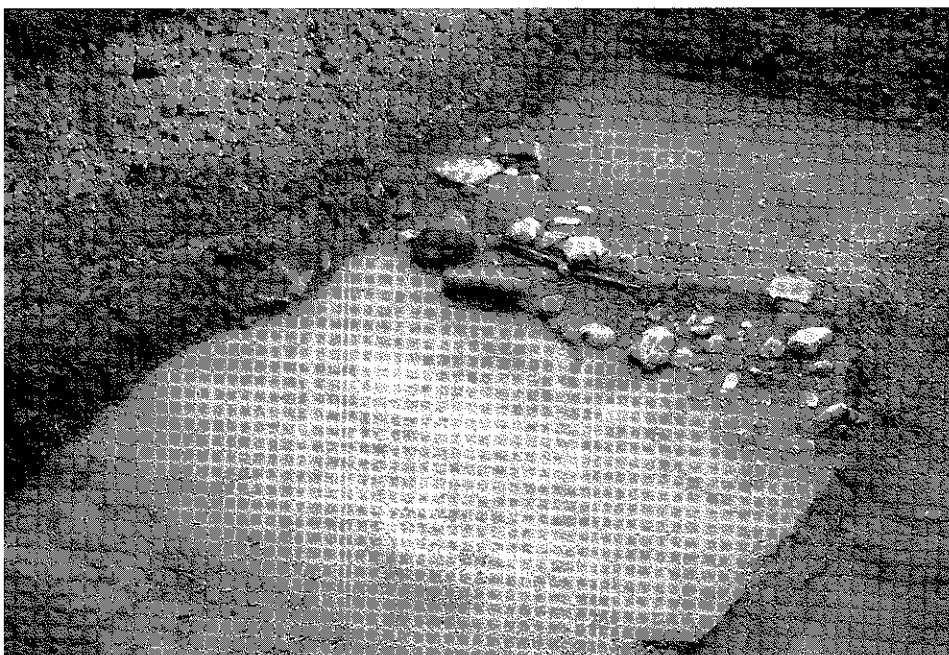




第20図 7 トレンチ完掘状況  
(SW→NE)



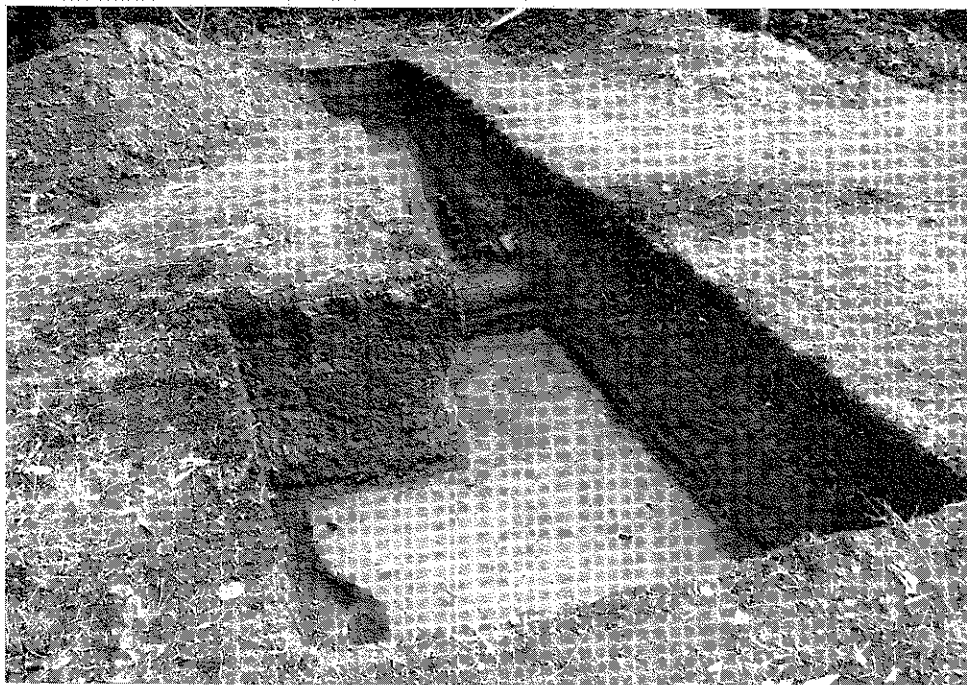
第21図 7 トレンチ北壁断面土層  
(SW→NE)



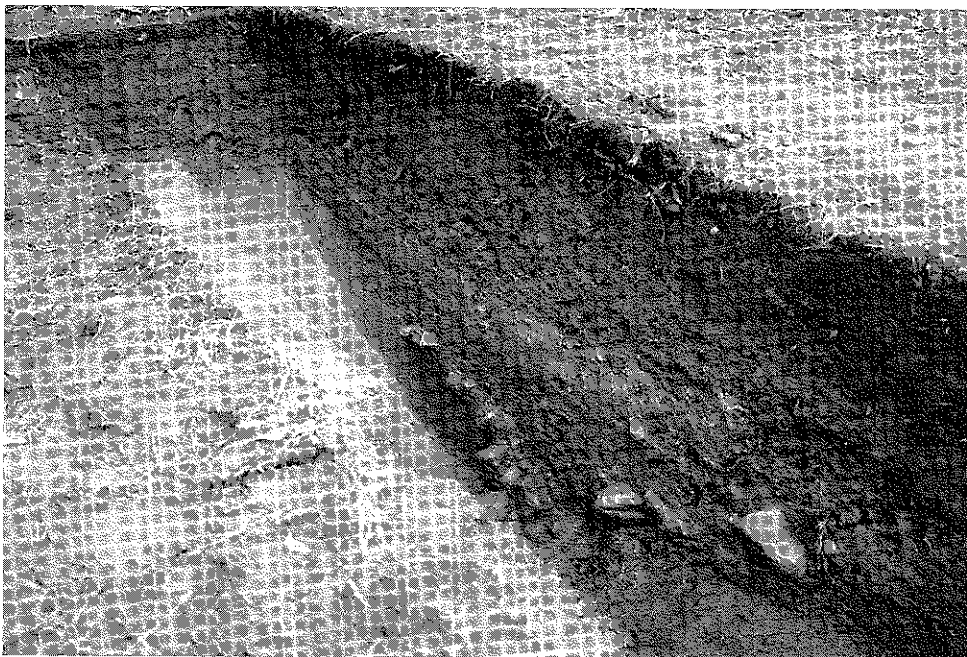
第22図 西肩部の検出状況  
(NE→SW)



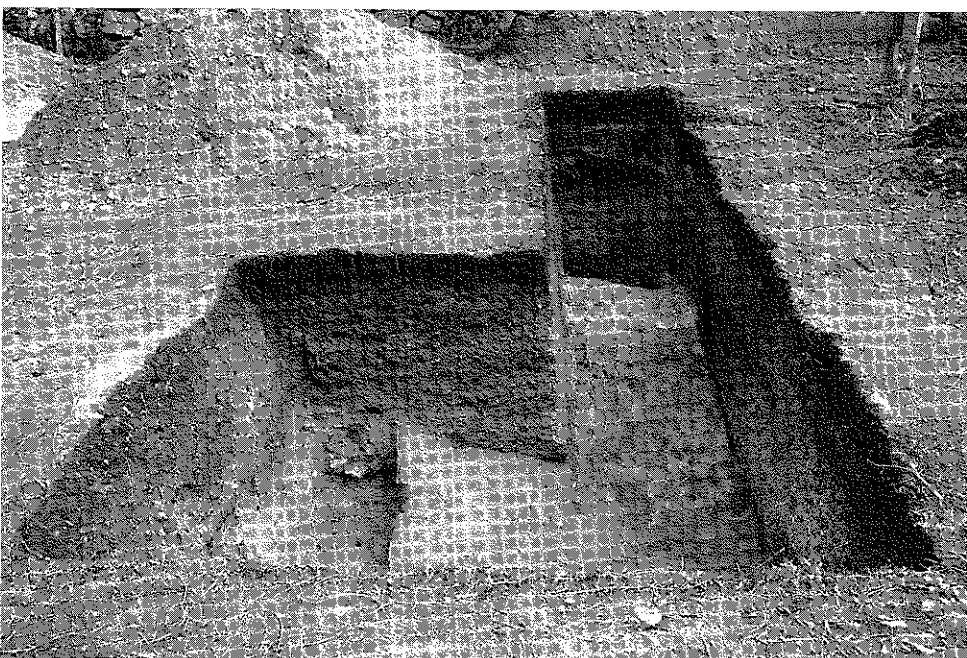
第23図 9 トレンチ全景  
(NW→SE)

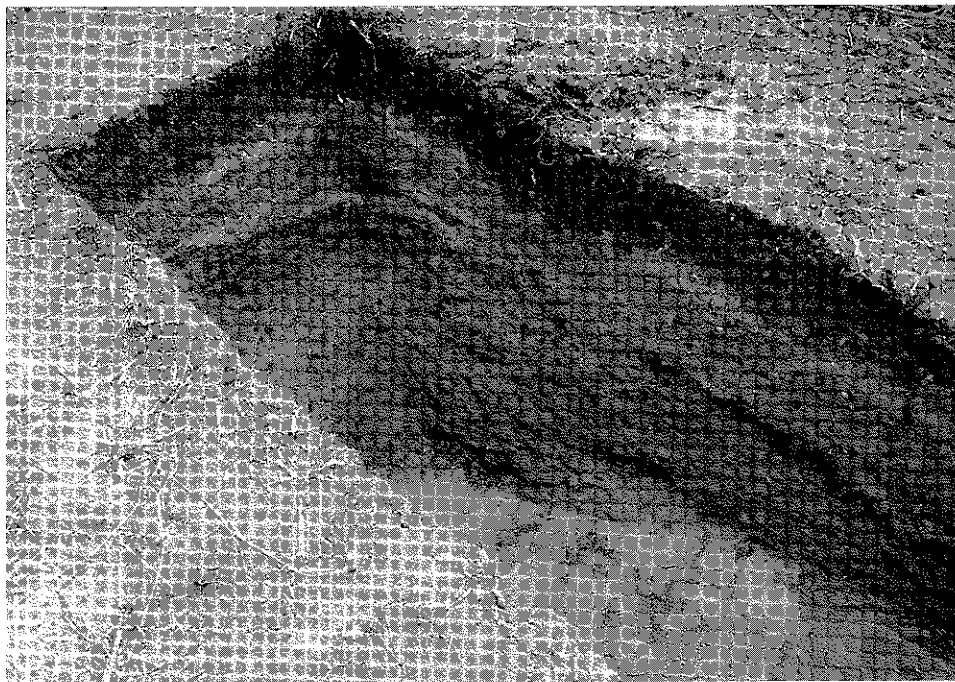


第24図 9 トレンチ東側検出の  
溝埋土状況 (NW→SE)

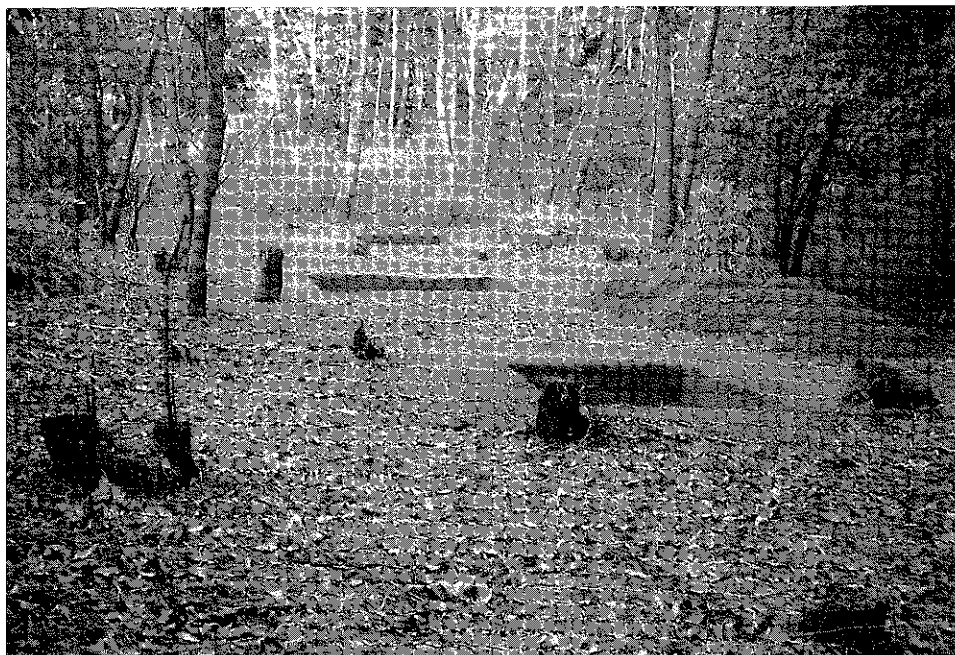


第25図 8 トレンチ全景  
(W→E)

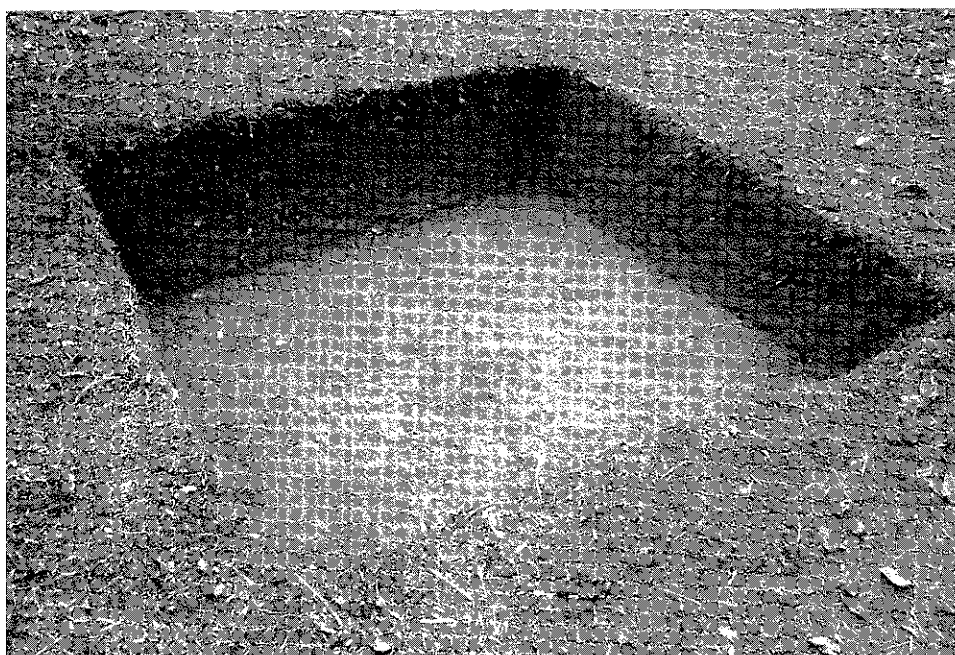




第26図 8トレンチ東側検出の落ち込み (NW→SE)

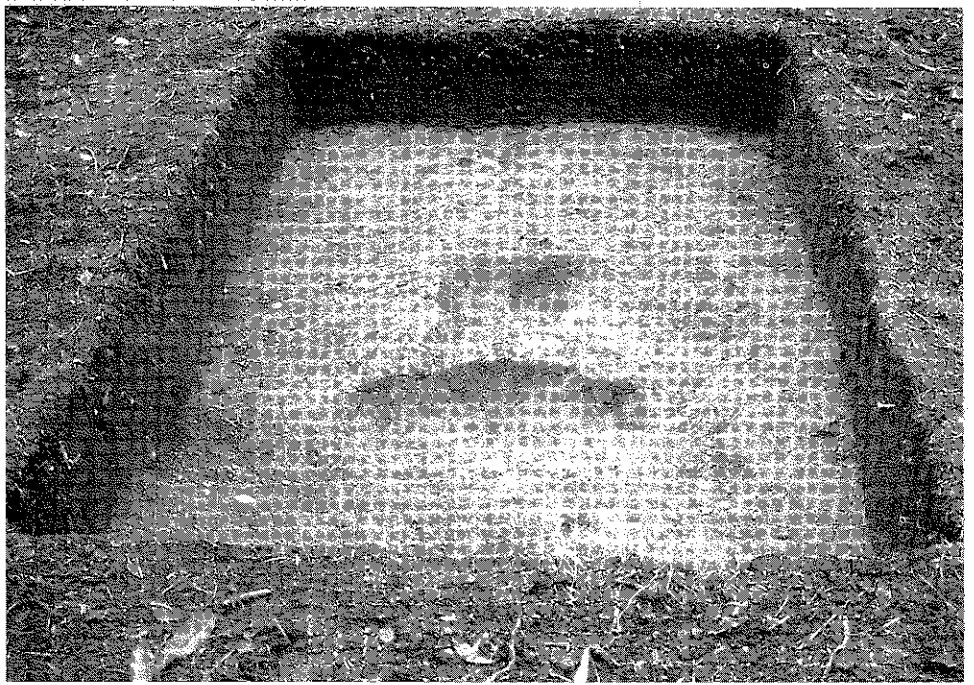


第27図 第4調査区(10・11・12トレンチ)全景 (S→N)

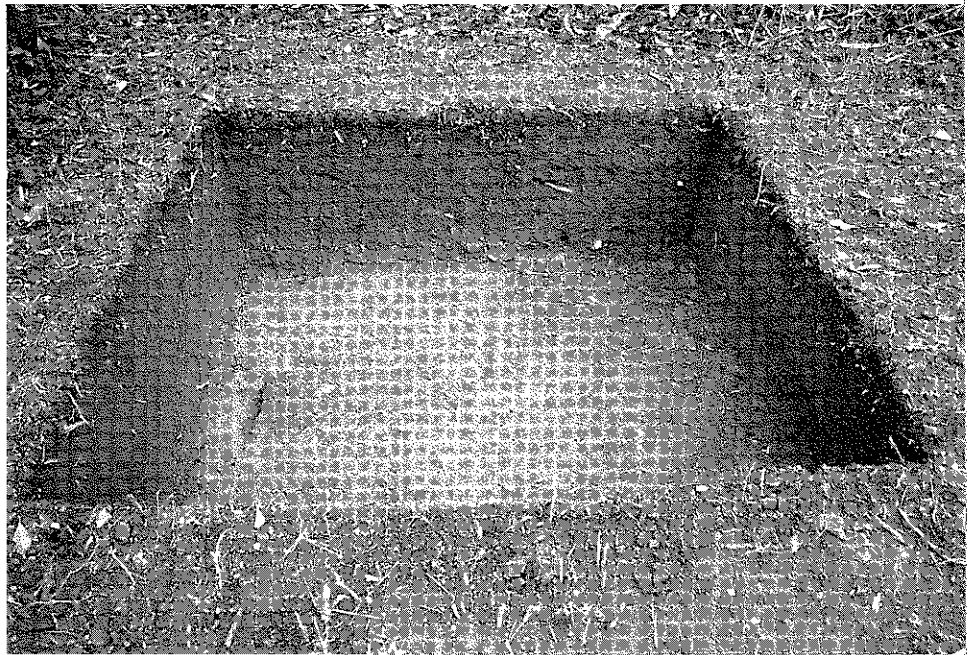


第28図 12トレンチ全景 (NW→SE)

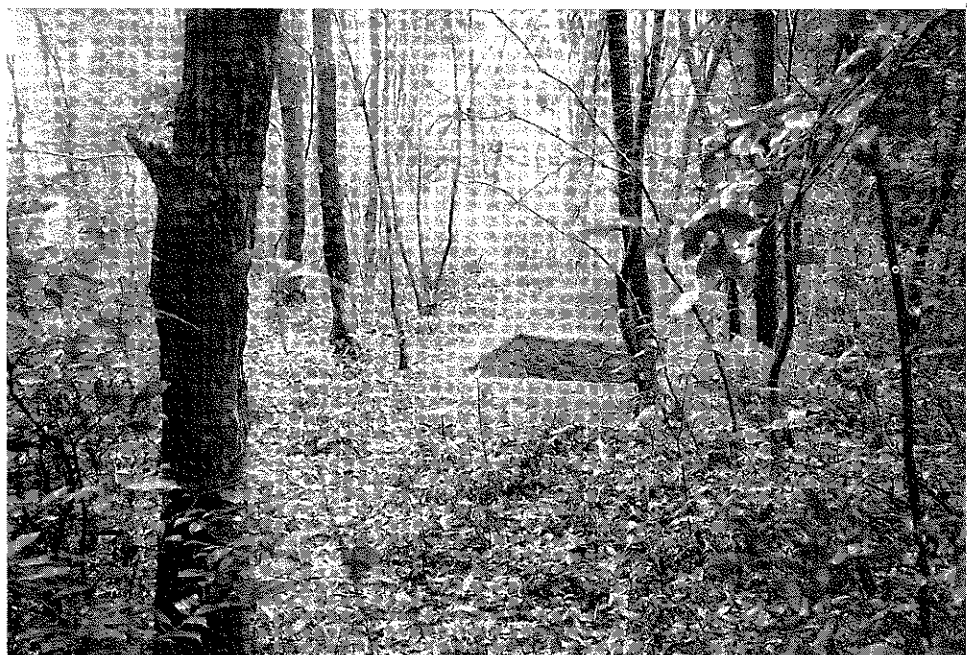
第29図 10トレンチ全景  
(SE→NW)

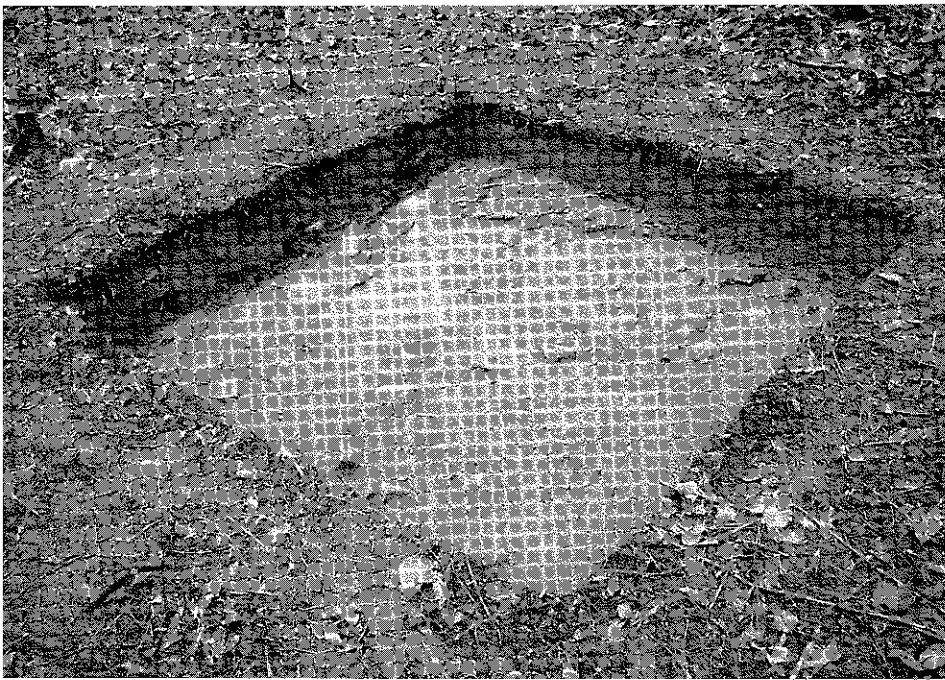


第30図 11トレンチ全景  
(NW→SE)

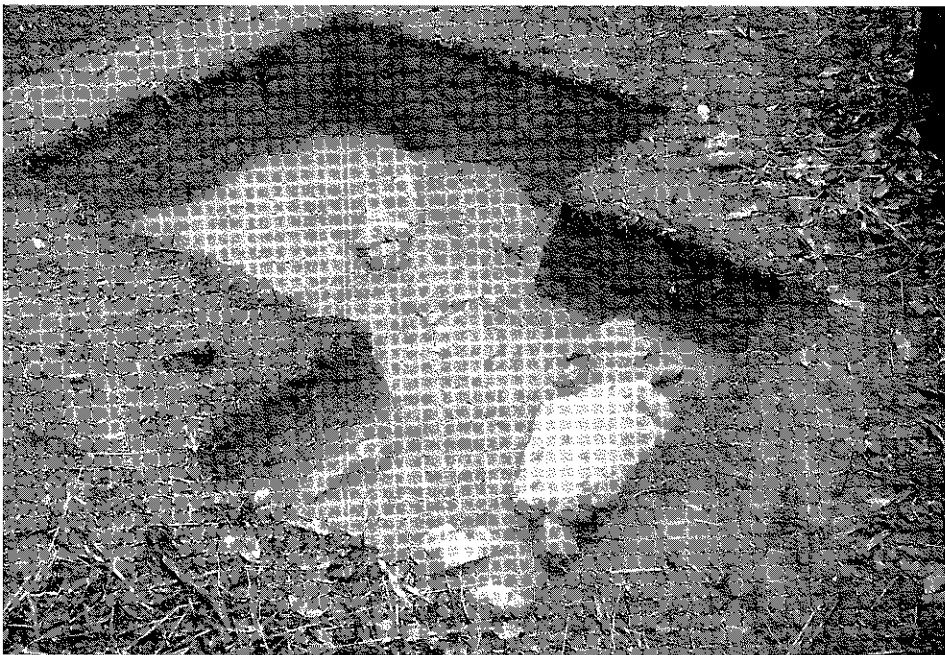


第31図 第4調査区(13・14・15  
トレンチ)の風景  
(S→N)

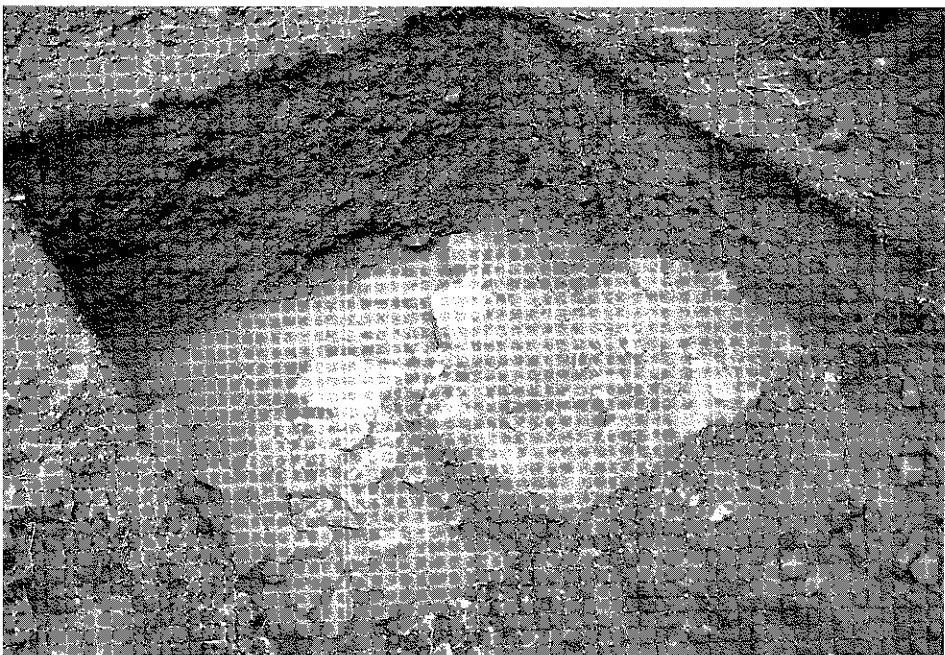




第32図 13トレンチ全景  
(SW→NE)



第33図 14トレンチ全景  
(W→E)



第34図 15トレンチ全景  
(SW→NE)

## V. 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物はコンテナ箱にして約10箱分である。その大半は、室町期のもので、土師器・瓦質土器・陶磁器・瓦等が出土している。出土遺物全体の様相は今後に期して、ここでは発掘成果上特に必要と考えられる第1・3調査区から出土した遺物の概要を報告する。

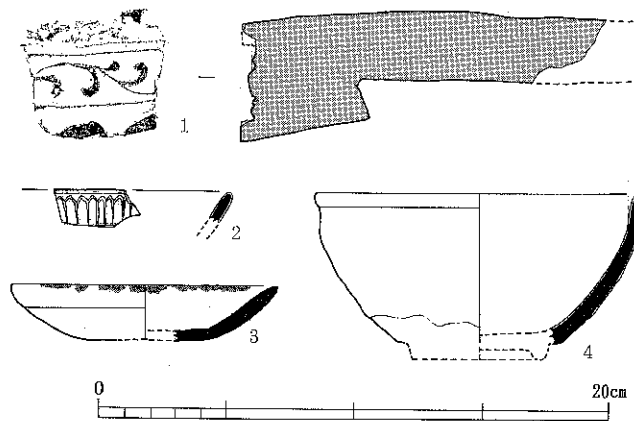
### 第1調査区出土遺物（第35図）

1・2が2トレンチ、3が1トレンチ、4が3トレンチから出土し、いずれも包含層出土である。1は均整唐草文軒平瓦である。平瓦凸面及び顎部にケズリ調整を施し、凹面に布目痕・糸切り痕を残す。段顎。灰白色。胎土に角閃石がみられる。平等院に同範品がある。平安後期。2は蓮弁文青磁碗である。蓮弁は細長く細かく表現され、緑青色の釉が施される。3は土師器皿である。体部が内湾ぎみに立ちあがるものである。口縁部に煤が付着し、灯明皿として利用されたとされる。橙褐色。口径10.6cm・器高2.2cm。17世紀か。4は瀬戸・美濃焼きの天目茶碗である。体部の丸みが強い。口唇部のくびれは大きく端部は玉縁状となっている。体部に銹釉が施される。復元口径13cm・器高5.9cm。17世紀。

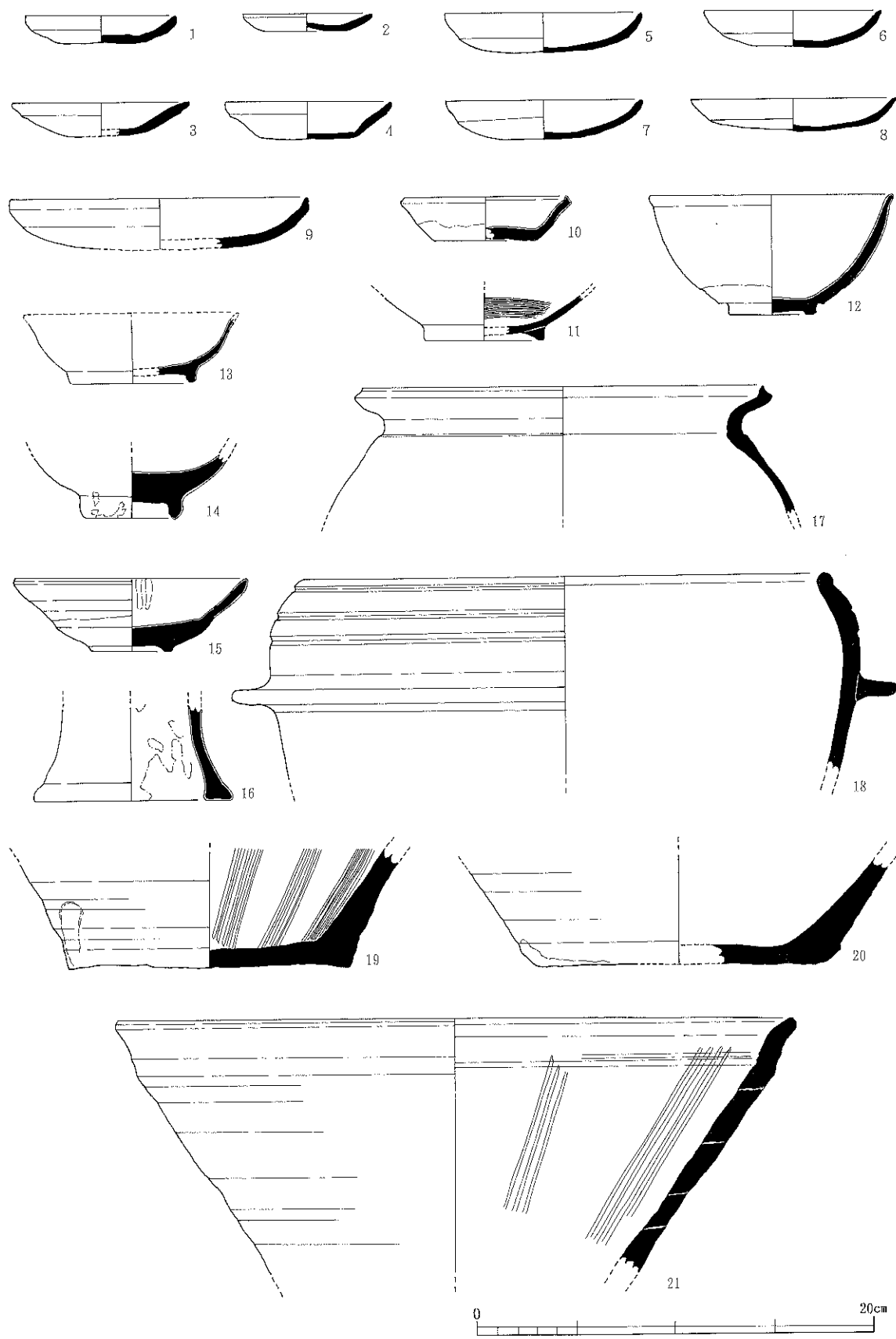
### 第3調査区出土遺物（第36図）

1は9トレンチ、20は8トレンチ、その他はすべて7トレンチで検出された遺物であり、出土物の大半は、溝埋土（腐植堆積層）からの出土である。まずこれらの遺物から述べていく。

7トレンチ出土遺物 腐植堆積層は前述したように基本的に2層に分別できたため、基本的に上層・下層に分けてそれぞれ遺物を取り上げた。整理した結果これらの遺物は、いずれも16世紀主体の遺物で概ね占められておりそこに顕著な時期差は認められなかった。ただし下層において古相を示す土師器皿（5～9）・瓦器碗（11）等が混在して出土していることは注意しておきたい。2～9は、土師器皿である。2はいわゆるへそ皿で、体部外面に指おさえの痕が明瞭に残る。口径7.2cm・器高4.9cm。淡褐色。口縁部に煤が付着し、灯明皿として利用されたと考えられる。3は口縁が外反し、端部外面を強く横ナデする。内面にはナデの痕跡が顕著にみられる。淡灰褐色。口径8.8cm・器高1.7cm。16世紀。4も口縁が強く外反し端部外面を強く横ナデする。内底面端に一条の圈線が巡る。淡黄褐色。口径8.4



第35図 第1調査区出土遺物実測図



第36図 第3調査区出土遺物実測図

cm・器高1.9cm。16世紀。5～8は口縁部を一段ナデするもので、色調は淡赤褐色である。いずれも摩滅が著しい。5は口径10cm・器高2cm。6は口径9cm・器高1.9cm。7は口径10cm・器高2cm。8は口径10.4cm・器高1.6cm。これらは13世紀のものと判断される。9は、口縁端部を強く上方につまみあげたものである。淡灰褐色。口径15cm・器高2.6cm。13世紀。10は、瀬戸・美濃焼きの小皿。外反する口縁部と端部外面を面とりするものである。底部には糸切り痕が残る。緑灰色の釉が施される。口径8.2cm・器高2.2cm。11は瓦器碗。大和型と思われる。見込み部のヘラミガキはジグザグ状を呈する。12世紀。12は、瀬戸・美濃焼きの天日茶碗である。口唇部は「く」字状を呈する。削り出しの輪高台。焦茶色の銹釉が施される。口径12.2cm・器高5cm。16世紀初頭。13は白磁碗であろう。内面の底部と体部の境に段差をもつ。内面に菊花文状の印花文が数か所認められる。14は青磁碗。見込みに花状文様が見られるが文様は明瞭ではない。明緑色の釉が施される。高台壘付部にまで釉がかかる。高台径4.6cm。15は唐津焼きの中皿。深灰緑色の釉が施される。高台はケズリ出しで、高台周辺は露胎である。体部は、若干屈曲しつつも外方向に大きく開く。見込みの目積み痕は、胎上目である。口径11.8cm・器高3.7cm。高台径4cm。16世紀末頃。16は、瀬戸・美濃焼きの花瓶底部であろう。深緑色の釉が施される。17は土師質甕。口縁が「く」字状を呈し、端部外面を面とりするものである。外面に煤が若干付着する。灰褐色。口径20.2cm。18は瓦質羽釜。体部が内湾ぎみに立上がり、口縁が玉縁状を擬している。罅と口縁の間には2本の沈線が施されている。口縁内外面・罅下部に煤状のものが付着している。口径26cm。19・21は信楽焼き播鉢。19は4条もしくは5条で1単位の播目をもつものである。内面はツルツルして播目が薄くなっている部位があり、使用頻度の高さが伺える。赤褐色。底部径14cm。16世紀頃。21は4条1単位の播目であり、口縁は強く横ナデが施され、「く」字状にゆるやかに外反する。内面が茶褐色、外面が灰白色を呈する。復元口径34cm。15世紀末頃か。

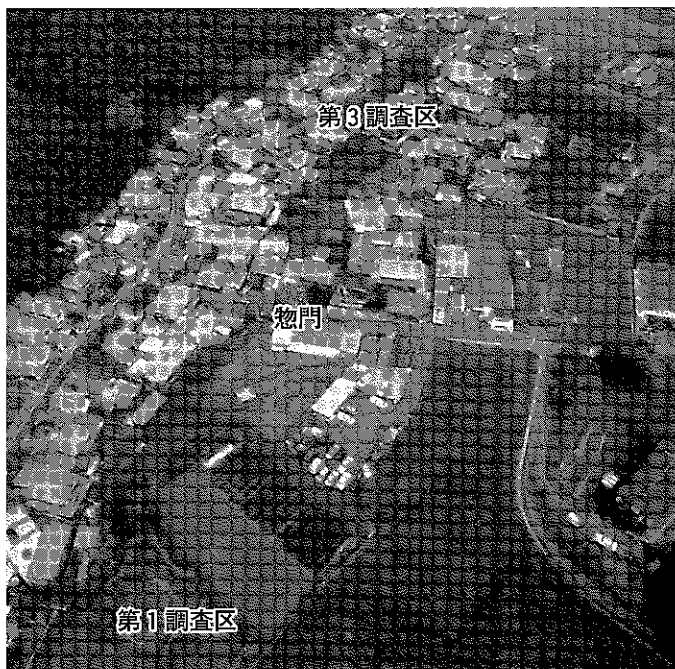
**8 トレンチ出土遺物** 1は土師器皿である。口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。赤褐色。粗製品。口径7.6cm 器高1.4cm。15世紀頃。溝を埋め立てる際に盛ったと考えられる黄褐色粘質土内から出土している。

**9 トレンチ出土遺物** 20は信楽焼き播鉢。9条1単位の播目をもつ。内面はツルツルしており播目はほとんど残っていない。底部端部にわずかに痕跡が認められる程度である。使用頻度は極めて高い。赤褐色。包含層からの出土である。

## VI. ま と め

以上、簡略ながら発掘調査の概要を述べてきた。ここでは、それらの成果を整理してまとめとしたい。

今回の発掘調査目的は西限を確定することであった。第1・2調査区の発掘成果によって西限は発掘以前に想定していた段丘崖がそのメルクマールとして妥当であり、この段丘崖を境界線としてその崖上すなわち東方域において金色院の中心寺域が展開していくものと理解された。現在、白川金色院跡の門口として単体で立つ惣門はまさしくその境界線上に立地しているのはその傍証ともなる。第3調査区では、段丘崖下を沿うようにして流れる小川を想定させる南北溝が検出された。溝内から16世紀の遺物が主として出土した。遺物は復元残存率が比較的高いこと、摩滅がほとんどみられない等から近隣から廃棄された可能性が高い。周辺の地形状況に鑑みれば、東側からの廃棄としてみた方が理解しやすい。調査区西側には現在南北に長い三段のテラスが存在する。その一つに地藏院が立地する。当地における地藏院の創立がどの程度まで溯れるかは判然としないが、「久世郡寺院明細帳」によれば16世紀中頃にはその名がみえる。この地藏院をも含む比較的規模の大きなこれら三段のテラスは、地形を大きく開削造成して造り出されている。当該地の造成が大規模であることと前述の土器の示す年代等から造成は、16世紀の坊院築造によって実施された可能性が高い。詳細な時期、地藏院との関連性については、今後整理していく過程で詰めていきたい。



第37図 南から金色院中心域を望む

今年度発掘調査の成果は当初目的を十分に達成することができたといえる。これまでの範囲確認調査成果とも併せてみれば北・南・西については概ね確定したといえる。問題は東方に広がる山間部をどの範囲まで含み込むかであろう。この遺跡の最大の特徴は景観を良く残していることである。遺跡の特性を損なわないよう史跡としての基本的理念を十分詰めた上で来年度範囲を検討・確定していきたい。



# 抄 録

ふりがな	しらかわこんじきいんあとはくつちょうさがいほう							
書名	白川金色院跡発掘調査概報							
副書名	平成13年度							
巻次								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第53集							
編著者名	浜中邦弘・西田倫子							
編集機関	宇治市歴史資料館							
所在地	〒611-0023 京都府宇治市折居台1-1							
発行年月日	2002年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	原因
しらかわこんじきいんあと 白川金色院跡	宇治市白川植田・鍋倉山・川下・川上り谷・宮の後・宮の前	26204	10	34° 52' 28"	135° 48' 55"	011018 ～ 020222	150 m <sup>2</sup>	範囲確認
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
白川金色院跡	寺跡	平安時代 ～ 江戸時代	溝	瓦・陶器・陶磁器・土師器・瓦質土器				

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第53集)

## 白川金色院跡発掘調査概報

- 平成13年度 -

発行日 平成14年3月31日  
 発行者 宇治市教育委員会  
 編集 宇治市歴史資料館  
 〒611-0023 宇治市折居台1-1  
 印刷 新進堂印刷所

